

ロンドンの留学生

——アラン・フルニエと夏目漱石の場合——

鈴木正昭

- 〈目次〉 §1 ヴィクトリア時代の終焉
§2 ロンドン生活入門
§3 ロンドン下宿事情
§4 ロンドン下宿賄い事情

§1 ヴィクトリア時代の終焉

アラン・フルニエは1905年の夏をロンドンで過ごした。わずか2ヵ月半の短い滞在だった。家族の知人の紹介でサンダーソン商会という壁紙製造業者の工場で働くためであった。仕事の内容は商業通信文の翻訳が中心だった。フルニエは将来を見越して英語の勉強をかねてロンドンで働いてみようと考えたようである。現在では、フランスの学生たちが休暇を利用して英語の勉強のために英国に滞在することはごく普通のことである。彼はいわばその先駆的存在だった。彼はエコル・ノルマルの受験を目指す学生で、英国滞りも労働そのものが目的ではなく、英語それもプラクティカルな英語の習得が目的とされていたので、短期留学の一種と考えられる。

世界が小さくなり、交通費も格段にやすくなった今日では、ホームステイなどを含め学生時代に異国体験することは、フルニエが学生だった90年前とは比較にならないほど日常茶飯事となっている。欧米の大学のなかには、長期留学だけでなく、夏季の講習会のような形で大学のキャンパスや教職員の有効利用に積極的なところが多数存在している。筆者のところにも毎年フランスの大学から直接に、または日本の斡旋業者からそうした講習会の案内状が届く。

楽しく有益だった滞りを終えて9月の中旬に英国を離れる時、彼は再度の訪英を予期していた。次回はフランス政府の給費留学生として英国に滞在するつもりでいたのである。しかし、あまりにも早い死によってこの願いが実現されなかったことは人々の知るところである。

彼がロンドンに滞在した1905年はわが国の年号でいえば明治38年にあたる。言うまでもなく、わが国では日露戦争が終了した年である。同年5月にわが国は日本海海戦で勝利をおさめていた。そして9月にはアメリカの斡旋によりポーツマス条約が結ばれた。19世紀の半ば、アメリカのペリー提督が大統領の国書を携えて浦賀沖に現れたのはほんの50年前のこと

にすぎない。50年というのは長いといえ言えないことはないけれども、過ぎてしまえばそれほどでもないといった程度の長さをもつ歲月である。年配の人であれば、第2次大戦から今日までの時の長さを思い起こしてみれば、それは容易に理解されるであろう。

そのわずか50年の間に、わが国は幕末、維新の騒乱を経て明治の新政府を樹立し、欧米諸国の制度や文物を採りいれて、非常な駆け足ではあったが近代国家の形態を整えた。新政府にとって大きな危機であった西南戦争以後、暴力によって政府の転覆を図ろうという動きは言論による議会創設運動、即ち自由民権運動へと移行した。その結果、大日本帝国憲法が制定されて名実ともに近代国家の体裁が整った。ほぼ時を同じくして、わが国は当時の先進国に倣って帝国主義国家への道を歩み始めた。

当時の世界ではプロシヤ、オーストリア、トルコを中心とする勢力とフランス、ロシアを中心とする勢力が対立し、英国が「名誉ある孤立」を守っていた。アジアに多くの權益を所有していた英国にとって、拡張を続けるロシアを押さえることは緊急を要した。英国がその孤立政策を放棄して1902年1月、日本との間に「日英同盟」を締結して世界を驚かせたのはそのためである。ヴィクトリア女王の死からちょうど1年後のことである。

ロシアの南下に危機感を強めていたわが国にとっても、英国との同盟は願ってもないことだった。両者の利害は完全に一致したのである。この同盟関係の成立はわが国が欧米先進国の仲間入りを果たしたことを意味するとして熱狂的に歓迎された。折りからロンドンに滞在していた漱石は、こうした日本国内の動きを「貧乏人が金持ちと縁組できたといって触れ回っているようだ⁽¹⁾」と酷評している。この同盟は20年近く維持され、1921年の4カ国条約の締結を機に破棄された。

日露戦争が勃発したのは、日英同盟締結後わずか2年後の1904年（明治37）2月のことである。この条約はまさに危機一髪のところでわが国を救ったのだ。戦争はいちおうわが国の勝利という形で終決したのであるが、その実態はほぼ互角だったというのが今日の定説になっているようである。

しかし国民はこうした実態を知らされておらず、日清戦争に比べてロシアから得たものが少ないことに不満を爆発させるものもあった。日比谷の焼き討ち事件などはその好例である。

日露戦争の開始から間もない同年4月に英仏協商が締結された。これは英国が日本側にとって参戦しなくても済むよう、フランスにもロシア側に立って参戦しないよう約束を取り付けるためだった。長い間植民地をめぐる敵対関係にあった両国が友好協力関係に入ったことは、その後の歴史に重大な影響を及ぼすことになる。日露戦争の終決後、ロシアに多くの権益を保有していたフランスが中心になって、1907年には日露協商、日仏協商、英露協商が締結された。このようにしてできあがった世界の構図は、これから数年後に世界を震撼させることになる第1次大戦の敵味方を指し示している。

アンリの英国滞在は、英仏両国が長年にわたる対立を解消して友好関係を樹立した直後のことだった。アンリが快適な滞在を終え、再訪を期して帰国することになったのも、こうした両国関係の好転が何がしか作用していたかもしれない。いずれにせよ、彼は英国に対してよい印象を抱いて帰国したわけである。わずか10年足らず後に未曾有の世界大戦が起こることも、また自分自身がそのもっとも早期の犠牲者となって27歳の生涯を終えることも、この幸福な滞在者は知る由もなかったのである。

アンリが臨時の社員として2ヵ月半ほど働くことになったのは、先に見たようにサンダーソン商会という会社だった。この会社のパリ駐在員とアンリの両親が知り合いだったところから、この英国滞在が実現したのである。彼の仕事はフランス語の商業通信文を英語に翻訳したり、逆に英語の手紙をフランス語に翻訳したりすることだった。将来英語の教員になる希望を抱いていたアンリにとって、ただ書物だけによる勉強に加えて「生きた」英語に接することは大きな魅力だったに違いない。

英国は、アンリが滞在するわずか4年前に、大英帝国の全盛時代のほぼ全期間君臨し続けた偉大なヴィクトリア女王を喪ったばかりであった。女王の統治の終わりはアメリカ、ドイツという新興工業国の追い上げを受け

て、「世界の工場」としての帝国の繁栄は脅かされてはいたものの、まだまだ大英帝国は「7つの海に日の没することのない」繁栄を謳歌していた。帝国がその危機的状況を迎えるのは第1次世界大戦以降のことである。女王の後にはエドワード7世が王位を継承した。彼の在位は1910年までで、その後はジョージ5世が継承した。アンリは、大英帝国がその繁栄に幾分翳りを見せてはいたものの、なおその最後の輝きを放っていた時期に、その光を全身に浴びながら、英国滞在を心ゆくまで味わったのである。

ところで、わが国は苦しい財政事情にもかかわらず、明治初年以来多くの留学生を欧米に送って先進国の学問・技術を学ばせていた。初期には自然科学系および法律が中心で、文学・芸術方面の留学生の派遣は行なわれなかった。それが明治30年代に入って、この方面の留学生の派遣も開始されることになった。後に漱石となる夏目金之助もその第1回の留学生として選ばれ、ヴィクトリア女王の最晩年の英国に赴くことになったのである。

漱石がドイツ船プロイセン号で横浜から旅立ったのは明治33年(1900)の9月8日のことだった。10月18日にナポリ着。そこで上陸して見物を済ませ、再び乗船した。ジェノヴァで船を下り、鉄道でパリに向かった。その赤ゲットぶりは日記や書簡等に面白おかしく記述されていて、外国旅行の経験がある人は、自らの体験と重ねあわせて思わず微苦笑を誘われる。コンパートメントでの座席争い⁽²⁾など、チャップリンの映画の一コマを彷彿させる面白さがある。

金之助はパリでは折りから開催されていた万国博を見物した。彼のパリ滞りは1週間という短期間ではあったが、パリにはよほど心奪われるところがあったのに違いない。なぜなら彼は2年間の英国留学終了後、引き続きフランスで留学生生活を継続したい旨を申し込んで、それが却下されたという事実があるからである。

漱石が英国に赴いた1900年は19世紀最後の年であるが、19世紀は万国博の世紀といっても過言ではないほど万国博が盛んに開催された。その嚆矢は1851年にロンドンのハイドパークで開催された万博である。会場として

建設された総ガラス張りのクリスタルパレス（水晶宮）は人々の関心を引き、新しい時代の到来を強く印象づけたことはあまりにも有名である。

万博はその後 55 年パリ、62 年ロンドン、67 年パリという具合に英仏両国で交互に開催された。以後は 78 年パリ、83 年アムステルダム、85 年アントヴェルペン、88 年バルセロナ、89 年パリ、93 年シカゴという具合に先進国の大都市を転々としたのだが、そのなかでもパリが開催に際立って熱心だったことは開催回数の多さから歴然としている。

89 年のパリ万博はエッフェル塔という記念建造物を後世に残したけれども、19 世紀最後の年に開催され漱石も見物した万博もプチパレ、グランパレを残した。これはクリスタルパレスと異なり、今日も現役の展示会場として利用されていて往時を偲ぶことが可能である。クリスタルパレスは万博後移築され、その後火災により焼失した。パリの地下鉄もまたこの 1900 年の万博に間に合うよう工事が進められた。

万博の入場料は 60 サンチームで、当時のわが国の貨幣に換算すると 24 銭にあたるそうである。これが現在の貨幣価値に換算するといくらになるかは、何を基準に取るかによっても変わるので、正確な比較は不可能であるけれども、2000 円とか 3000 円という額だったのではないだろうか。これに加えて各国のパヴィリオンの入場料は別途であるから、多くの国々のそれを覗いてみるには相当の金額が必要だった。なおパヴィリオンの入場料は国により異なっていて、1 フランから 5 フランの間だったようである。漱石はパリ滞在中に 3 回万博会場を訪れている。よほど心を奪われるものがあつたに違いない。彼はエッフェル塔にも登っている。グラン・ブルーパールでは「銀座通りを 50 倍くらい立派にした⁽³⁾」ようだと書き残している。

日本はこの万博に陶器や西陣織を出品していた。これらの展示品は折りからのアール・ヌーボーの風潮もあり、相当の関心を引いていたようである。また川上音二郎・貞奴の夫婦もここで芝居を上演し、若き日のピカソの注目を集めていた。こうしてパリ見物を済ませた漱石は 10 月 28 日にロンドンに到着した。

当時、パリからロンドンに行くのには3つのコースがあった。パリのサン・ラザール駅からディエップに行き、船でニュー・ヘヴンに行き、そこから鉄道でヴィクトリア駅に行くコース。他の2つは、北駅からブローニュあるいはカレーに出て、そこから連絡船に乗って対岸のフォークストンあるいはドーヴァーに至り、そこからロンドンに至るコースである。今日では後の2つのコースのほうがより多く利用されているようであるが、当時はディエップからニュー・ヘヴンに渡り、そこから鉄道を利用するというコースが一般的だった。出口保夫氏は『ロンドンの夏目漱石』において、漱石もこのコースを利用したであろうと思われる根拠を、書簡に現れたいくつかの時間を計算することにより立証⁽⁴⁾している。そして、その5年後にはアンリが同一のコースを経由してロンドンに渡ったのである。

§2 ロンドン生活入門

ロンドン到着後間もなく金之助は倫敦塔を訪れている。続いて大英博物館、ナショナル・ギャラリーなどをも訪れた。ただしナショナル・ギャラリーは2つあり、彼が訪れたのがそのうちのいずれであるかは判明していない。2つのうち片方はトラファルガー広場に面したそれであり、あと1つはテムズ河畔にありテート・ギャラリーと呼ばれることもある。ロンドン滞在中に漱石は何度かこれらの美術館を訪れた。芝居もかなりよく見ている。それに反して音楽会へは1度しか行かなかった。

トラファルガー広場に面したギャラリーは、1824年に銀行家アンガースタインの残した絵画を国家が購入し、それを基に設立された。当初はアンガースタインの邸宅で公開されたのであるが、その後新たな作品が購入されたり寄贈されたりして手狭になったため、現在地に移転したのである。フランスなどの美術館の場合、王侯の所持していた美術品が国家に接收されて、それを基に設立されたものが多いのに対し、英国のそれは個人の所持品を国家が購入して、それを基に造られたものが多いのは興味深い事実である。

テート・ギャラリーの場合も、砂糖で財を成したヘンリー・テートの所有していた絵画を基に設立されたという点では同様である。開館は 1897 年である。漱石もアンリも、今年創立 100 年になる同美術館のもっとも初期の訪問者だったわけである。1910 年には、もう 1 人の篤志家デュヴィーンから多くのターナーの絵画が寄贈された。漱石もアンリもターナーの絵画に強く引かれていたけれども、彼らはこのターナーコレクションを見ることはできなかったのである。

多くの国で美術館、博物館が入場料を徴収しているのに対し、英国のそれは大英博物館も含め無料というのは興味深い事実である。美術館の成り立ちの相違、入場料の有無などの原因を追求していだけで英国論ないしは英国人論が書けるのでないだろうか。

トラファルガー広場に面したギャラリーは 13 世紀から 15 世紀のイタリア、フランドル、ドイツの初期ルネッサンス絵画の充実したコレクションで知られている。またそれに続く盛期ルネッサンス、バロック時代作品もきわめて充実している。また 19 世紀前半までの英国絵画の作品も多数収蔵されている。それに対し、テート・ギャラリーは英国絵画の優れた作品を多数所有していることで知られている。とりわけホガース、ターナー、ブレイク、ホイットラーおよびラファエル前派の充実ぶりであまりにも名高い。いずれにしても日本とフランスからの留学生にとって、これらの美術館はロンドンで最もお気に入りの場所だったのである。

漱石はナショナル・ギャラリーを双方とも訪れているけれども、彼がより多くの共感を抱いたのはテート・ギャラリーだった。「坊っちゃん」にターナーへの言及が見出されることは多くの人が記憶しているであろう。また画壇で孤立していたターナーを擁護するために書かれた「近代画家論」の著者ラスキンへの言及も、例えば「三四郎」に見出される。「草枕」の水に浮かぶオフェーリアのイメージは、ジョン・エヴァレット・ミレーの「オフェーリア」なしには考えられない。こうした漱石とターナーおよびラファエル前派との関係をめぐっては、既に江藤淳氏の「漱石とアーサー王伝説」や佐渡

谷重信氏の「漱石と世紀末芸術」をはじめとする業績が蓄積されている。

アンリ・フルニエの場合も漱石同様2つの国立美術館を幾度か訪れている。生涯の友であり妹イザベルの夫でもあったジャック・リヴィエールは、アンリ宛ての書簡で自分は将来音楽哲学の研究者になりたいと思っていることを打ち明けているほど、聴覚型の人であったのに対し、アンリは音楽が嫌いというわけではないものの、書簡集においても音楽への言及が比較的少なく、それに反し絵画や展覧会の印象を述べている個所はきわめて多いので、どちらかといえば視覚型の人だったのではないかと思われる。ロンドン滞在が終わりに近づいたある日のこと、彼はコンサートのプログラムを示して、リヴィエールにそれぞれの曲についての解説を依頼している。1905年の夏のロンドン滞在中に、家族やリヴィエール宛ての書簡においても、イギリスの風景や公園の美しさ、美術館の印象記が多いのに対して音楽に対する言及はきわめて少なく、ほとんど上記のものに尽きているとあっていい。もちろん、ロンドン郊外の高級住宅地の美しい邸宅から漏れ聞こえてくるピアノやフルートの音色に対して、彼はけっして鈍感ではなかった。

～漱石の英国滞在は1900年(明治33)10月から1902年(明治35)12月までのおおよそ2年だった。その間の大きなできごとといえば、1901年に新しい世紀が始まってほぼ3週間後の1月23日のヴィクトリア女王の死去および次の年の日英同盟の締結である。

ロンドン到着の翌日外出した漱石は、ただならぬ人込みに出会い度肝を抜かれた。それはトランスヴァールでの戦争から凱旋した義勇軍を出迎えるために集まった群衆である。彼がこの義勇軍の行進を目撃したのはオクスフォード通りである。義勇軍はパディントン駅からセント・ポール寺院へ向かう途中だった。ボア戦争とも呼ばれるこのトランスヴァールでの紛争は、その土地で巨大な金鉱が発見されたために、それを奪取しようとする英国と以前からそこに住むボア人との間の紛争である。1899年10月から始まった戦闘は、翌年の春には英国の勝利によりいちおうの決着を見、秋には英国軍の帰還が始まった。漱石がオクスフォード通りで見たのはこうした帰還兵

の一群だった。

帝国主義の時代にあっても、この英国の行動は他の国々の厳しい批判をあび、英国は自国の孤立をますます思い知らされることになったのは言うまでもない。そのわずか2年足らず後に日英同盟が結ばれたゆえんである。

女王はワイト島のオズボン離宮に滞在中の1月15日に倒れ、翌日から意識不明の状態が続いていた。それがマスコミを通じて国民の知るところとなったのは22日のことだった。漱石の日記にも「女王危篤ノ由ニテ衆庶皆眉ヲヒソム⁽⁵⁾」の記述が見出される。

漱石の滞在期間中は、漱石にとっても日本にとっても重要な期間であったことはもちろんであるが、英国にとっても重大な過渡期だったのである。

漱石が滞在していた当時の英国人の大半は、女王の治世以外の時代を知らなかった。60歳の人間でさえも、それまでの生涯のすべてを女王とともに生きてきたのである。ヴィクトリア女王の治世は実に1837年から1901年まで60数年の長きにわたった。彼女が20世紀最初の年の開始とともに亡くなったという事実は、ある1つの時代の終焉を人々に強く印象づけたに違いない。

女王の長期の治世の間に、英国はその国の歴史開闢以来他に例を見ない繁栄の時代を築いた。英国民がこぞって女王の病状に一喜一憂し、その死に際して深い哀悼の意を表明したばかりでなく、おおきな喪失感に見舞われたのは想像に難くない。その時代が偉大な時代であればあるほど、その終焉に際して人々の感じる喪失感もまた深いということは普遍的な感情ではないかと思われる。漱石自信もその晩年の作「こころ」において明治天皇の死に際して、「私はその時明治の精神が天皇とともに永遠に去ったという気がしました。私たち共に生きてきた人間がこれからも生き残るのは時代遅れのような気がします」という意味の感慨を先生に述べさせていることは誰でも知っている。もちろん、これは小説の登場人物「先生」の感慨ではあるが、私たちはこれが漱石その人の感慨でもあった、と言いたい気がすることも事実である。

漱石も女王の死に際しては下宿の主人とともにその葬列を見送った。背の低い彼は混雑のため葬列を見ることができず、主人に肩車してもらわなければならなかった。肩車どころか大きな木に登って葬列を見送った人々もまた多かった。この様子は写真にも残されているし、漱石もその日記に「樹木皆人ノ実ヲ結ブ⁽⁶⁾」と書いている。

比較的最近の有名な君主で、この長期の治世に匹敵するのは清の乾隆帝くらいであろう。偉大な皇帝の治世は 1735 年から 1796 年であり、やはり 60 年以上の長期政権だった。英国は、女王の治世の末期から新興のアメリカやドイツに工業生産の面で激しい追い上げを受け、その優位が揺らぎ始めていた。また、従来の国是であった名誉ある孤立政策の維持も覚束ないものになっていた。こうしたほころびを繕うべく日英同盟が締結され、引き続いて 1904 年には英仏協商が締結された経過は既に見たとおりである。

先に英国に滞在した漱石も、後からやってきたアンリも、それぞれの祖国が英国ときわめて友好的な関係にあった時期にそれぞれの滞在生活を過ごしたわけである。そういう点では両者ともいい時期に滞在したわけである。それにもかかわらず、両者が英国に対して抱いた印象は正反対だった。前者は後に「文学論」の序文で、「英国滞在の 2 年は我が生涯のうちで最も不愉快な 2 年間だった」という意味のことを述べなければならないほど英国嫌いになって英国を後にしたことは広く知られている。それに対し、アンリは再び英国に戻ってナイチンゲール氏とも再会するつもりで英国を後にしたのである。

漱石やアンリの金銭的な基盤はどのようであったか。漱石は年 1800 円を政府から支給される留学生だった。1 ヶ月 150 円というのは当時の平均的日本人の給与から見れば大変な額だった。なにしろ明治 30 年当時の巡査の初任給が 9 円、同年の小学校教員の初任給が 8 円、最高のエリートだった高等官（現在の国家公務員上級職）のそれが 50 円の時代である⁽⁷⁾。

当時の英国で 150 円が今日の日本円にしてどの程度の使い出があったかは、正確な数値をはじき出すことは不可能である。それにしても、この金額

はそれ自体としてはそれほど貧弱な金額ではない。しかし人間は他と比較して幸不幸を感じる事がしばしばある。そして彼の周囲の日本人は企業関係者が多く、金銭的には彼よりもはるかに恵まれていた。彼の不遇感の原因の1つはここにあったように思われる。

§3 ロンドン下宿事情

出口保夫氏は『ロンドンの夏目漱石』のなかで、日記や書簡を詳細に検討することにより、彼の金銭生活を相当程度まで明らかにしている。それによれば、彼の月額150円という額は余裕のある生活を送るには十分とまではいなくともけっして少なすぎる額ではない、とのことである。その例として、漱石よりも少し後に同じ英国で留学生生活を送った島村抱月が引き合いに出されている。抱月の場合には漱石よりも少ない額だったにもかかわらず、それほど悲惨な生活ではなかったというのが出口氏の結論である⁽⁸⁾。そして漱石のロンドンでの住まい（彼は2年の間に5件の下宿屋を転々とした）に関する記述が暗い色調で染められている点についても、実際に現地での調査を踏まえて、これらの住まいが当時のロンドンで特に粗末な住居ではなかったことを立証されている。ということになれば、暗い色調はもちろん彼の精神状態が住居の記述にまで浸出して、それを精神と同じ色に染め上げた、と考えるのが妥当であろう。また、わずか2年の間にこれほど転々と引越しを繰り返したことが、彼の何物かに追い立てられているような焦りに由来するものであろう。そして事実ではなかったとはいえ、「夏目発狂セリ」という噂が流れるほどの精神の変調ともどこかで繋がっているのではないだろうか。

アンリの場合は、サンダーソン商会からは独立した世帯を営むだけの給料は支給されていなかった。彼の週給ではナイチンゲール氏へ支払う家賃と食費にも足りなかったのである。わが国と異なり英国は当時から給料の支払いは週給であったし、家賃も週の初めに支払うことが普通だった。彼はたびた

び両親に無心の手紙を出しているが、これは彼が金遣いが荒かったからというわけではない。最初から家庭の仕送りを前提とした英国滞在なのであり、この点で漱石の場合とはまったく事情を異にしていたのである。

金の使い道は、漱石の場合は3食付きの下宿代を別にすれば、何といっても書籍購入費が中心を占めていた。出口氏は前掲書で、1900年12月から1901年7月までの漱石の金銭生活を次のように推計している。⁽⁹⁾

下宿代 (3食付き) ……………	53 円
クレイグ先生授業料……………	10～12 円 50 銭
書物費……………	50～60 円
雑費 (観劇・交際費等)……………	25～35 円
計	150 円

書籍費のほかには観劇に費やされた額が多いのが注目される。その他、美術館も自分だけで行く場合はもちろん、知人がロンドンを訪れた場合など、よく案内していることが日記の記述から明らかにされている。入場料は無料にしても交通費、会食にかかる費用もある程度の額になったものと思われる。その反面、音楽会にはほとんど足を運んだ形跡が残されていない。彼もまたアンリ同様、耳の人というよりは目の人だったように思われる。

漱石が英国に滞在していた時代の円とポンドの交換比率は大体1ポンド=10円くらいだった。⁽¹⁰⁾従って、漱石の月額150円は大体15ポンドに相当するわけである。ところで、月額15ポンドの収入というのは当時の英国でどの程度の階層の月収に対応していたのであろうか。英国の貨幣制度は1971年に大きな変更が加えられるまでは1ポンド=20シリングで、1シリング=12ペンスという複雑な制度が採用されていた。

19世紀の後半の英国では、年収100ポンドから1000ポンドくらいまでが社会の中間層と呼ばれていた。そして、ロンドンでも3分の1くらいの世帯では週給1ポンド、すなわち年収50ポンド前後だった。そうすると漱

石の月額 15 ポンド、即ち年額 180 ポンドというのはけっして少ない金額ではなく、中間層の年収に相当するものだった。しかも、留学中の彼は自分一人の身を養えばいいのであるから、一般の英国人からみればまさに独身貴族といってもいいほど楽な暮らしができたはずなのである。初めての異国での暮らしであるから、その土地に住みなれた人より多くの費用がかかるのはある意味では当然のことである。

そうではあっても、社会の中間層 1 世帯分の金銭を独りで使うことができたのだから、それほど金銭的に困窮していたというのは、当時の円とポンドとの交換比率を考慮に入れても腑に落ちない話である。ちなみに彼の留宅では、妻の鏡子が子どもを抱えながら月額 25 円の家族手当で暮らしていたのである。ロンドン滞在中に限らず、漱石の金銭感覚は当時の平均的日本人のそれと比べてやや異質なのではないだろうか。彼の日記や書簡、またいくつかの作品には金銭的な苦労話が比較的多く出てくるけれども、彼は当時の平均からすれば相当な高給取りであり、むしろ生活にも余裕がある階層に属していたはずなのである。彼は、「坊っちゃん」の舞台となった松山中学では、校長の月給が 60 円だったのに 80 円もの給料を取っていたことは有名な話である。そして次に赴任した熊本の五高では 100 円の月給を取っていたのである。先に見た各種公務員の給与と比べても彼は相当な高給取りである。

当時の日本人としては相当の高給取りでありながら、漱石が絶えず金に追われていた理由の 1 つは彼の書籍購入費の額の大きさである。それはロンドン滞在中も変わることはなかった。それが月額 50 円～60 円にもものぼったのは、ロンドン滞在中には研究を纏めることが不可能なため、故国での研究に必要な書籍を 1 冊でも多く買っておきたいという気持ちからであった。また書物自体、今日と比べると非常に高額な商品であったことも確かである。

われわれは漱石自身の記述から彼の英国滞在实际以上に悲惨なものだと思込まされている面もあるように思われる。もちろんロンドンの暮らしが

総体として快適なものでなかったことは間違いない。彼は精神的に絶えず追い立てられ、追いつめられていた。ただわれわれは、そのことから彼の物質生活も非常に悲惨なものだったと考える必要はないのである。異国での初めての暮らし、多額の書籍費といった事情をすべて考慮に入れても、なお彼の留学生生活は金銭的にはそれほど惨めなものではなかったと断言して差し支えないものと思われる。

問題のあったのは彼の精神状態である。2年にわたるロンドンでの生活がすべて不安定な精神状態に支配されていたわけではないにしても、相当な精神の危機を迎えた時期があったことは否定できない。下宿から一步も出ないで自分の部屋でシクシク泣いているといった噂、「夏目発狂セリ」という文部省宛ての発信人不明の電報、「夏目とともに帰国すべし」という訓令を受けた漱石の友人の存在、こうした事実は誰もが承知している。しかし、その不安定な精神状態が何に起因するかは必ずしも明らかにされているわけではない。わが国と英国の文化の相違、研究対象を絞ることができないことに由来するいらだち、性的な接触を断たれ、他の日本人のように「地獄」を買うこともできない潔癖さによる性的な抑圧、精神病の存在など、彼の生前から今日に至るまでその原因はさまざまに語られてきた。

アンリの場合は漱石の場合とあまりにも対照的だった。金銭的には漱石の場合とは異なり、誰が見てもそれだけでは大変だと納得できる収入だった。アンリの週給は10シリング、すなわち0.5ポンドであったから、それを4倍にしてもわずか2ポンドということであり、週給を52倍して年俸に換算すると26ポンドであるが、これは最下層の労働者の年収にも及ばない額なのである。漱石の180ポンドと比較するだけ野暮というものであろう。わずか7分の1に過ぎない。彼の週給では彼を自宅においてくれたナイチンゲール氏への家賃と食費の支払いにも不足をきたした。従って、自宅からの送金なしでは彼のロンドン生活は成り立たなかったのである。自宅からの送金がどの程度あったのか、今日われわれに残された資料から正確な額を知ることが不可能である。いずれにせよ、アンリは滞在中に何度か催促の手紙を

書かなければならなかった。

当時のフランスと英国の通貨の交換比率は大体 1 シリング=1.25 フランだった。従って、当時の日英仏 3 国の通貨の交換比率は、1 ポンドに対応する日仏領国の通貨に換算すると 1 ポンド=10 円=25 フランくらいだった。以下、漱石やアンリの記事、書簡に見出されるさまざまな価格を今日のそれと比較してみよう。

ロンドンに到着した漱石はガワー・ストリート 76 番地のホテルに旅装を解いた。このホテルは 1 泊 6 円だった。すると月に 180 円も必要になり、彼が支給されることになっていた月額 150 円すべてを注ぎ込んでも足りないことは明らかだった。当時はこの半額くらいでも宿泊できるホテルが「ベデカ・パリ」には紹介されていたようであるから、比較的高級なホテルに宿泊したものと思われる。明治 31 年当時、帝国ホテルの宿泊料金が 1 泊 5 円、同 37 年が 6 円⁽¹⁾だったので、彼がロンドンで最初に滞在したホテルはある程度高級なホテルだったと思われる。

高額な宿泊代に音を上げた彼は、それ以後は賄い付きで週 1 ポンドよりもやや高い程度の下宿を転々とするようになった。出口氏の挙げている数字から計算すると、漱石は 3 食付きの下宿に 1 ヶ月 13 万円弱の支払いをしていたことになるけれど、大体妥当な数字とっていいのではないだろうか。それでもナイチンゲール氏の家泊めてもらい、毎週 12 シリング (月 6 万円くらい) を支払っていたアンリの家賃に比べれば高い。しかし、アンリの家賃自体が採算を度外視した破格の好意の現われであった以上、比較すること自体あまり意味がないかもしれない。もっとも、その 12 シリングに満たない週給しか支払われていないのは不当に安い賃金で働かされたからだと考えられるが、まったく経験のない異国の高校生など、会社から見れば元々戦力外の存在でしかなかったのである。

ロンドンに着いて間もなくアンリはいろいろと買い物をしている。以前別稿でも触れたことがあるが、それは次のようなものである。⁽²⁾

麦藁帽子……………	3 シリング 6 ペンス
靴下 1 足……………	1 シリング
ネクタイ……………	1 シリング
便箋……………	1 シリング
たばこ (1 箱)……………	6 ペンス
レモネード……………	6 ペンス
市電 (片道)……………	1 ペニー
地下鉄 (片道)……………	2 ペンス
はがき (1 枚)……………	1 ペニー

以前の論文執筆時には、はがきおよび市電片道運賃 (1 ペニー) を現在のわが国の 100 円くらいではないかと推定し計算を試みたのであるが、そうすると現在ののはがき 1 枚は 50 円で JR 線の初乗り運賃は 130 円であるから、ここで既に大きな食い違いが生じてしまう。しかし物の値段が国により異なるのは当然であるし、値上がりの割合も物により異なるのは当然である。

たとえば傘とか靴の価格は昔とあまり変わっていないのに対し (ということとは実質的には大幅な値下がりをしているということである)、多くの物は時代に応じて大きく価格が上昇している。ただ、給与も大体同じ割合で上昇してきたから暮らしが成り立っているわけである。筆者の学生時代 (1960 年代後半) にはラーメンは大体 60~70 円だったのが、現在ではおおよそ 400~500 円くらいの店が多いようである。喫茶店で飲むコーヒー 1 杯の価格も同様に、当時は 60~70 円で今日は 400~500 円の店が多いように見受けられる。当時は、今日ここかしこに見られる 150~180 円でコーヒーを飲ませる店は (当時の金に換算して 20 円くらい) 筆者の知る限りでは存在しなかった。ということは、これらについては大体 7 倍くらい上昇しているということである。しかし、レコードは (といっても当時は LP、現在は CD なのであるが) 1 枚 2000 円から 3000 円くらいしていたけれども、現在もほぼ同価格か場合

によってはそれ以下で買えることも多い。現在では 500 円で買えるクラシック音楽の CD さえあるけれども、当時はどんなに安くても 30 cm の LP レコードは 1000 円はしていたような記憶がある。

アンリが購入したたばこやレモネードはそれぞれ現在の 600 円くらいになり、あまりにも高価に見えるけれども、当時はこうした品は現在より高級品だったのであろうか。また便箋の 1200 円も現在のもの比べて高すぎる。またネクタイ 1200 円は安いという感じがするけれども、靴下 1足 1200 円は少し高いのではないかという感じがする。しかし他の品目をも考慮すると、この交換比率はそれほど荒唐無稽なものではないはずである。

漱石は金銭的な理由もあって大学に籍を置くことを断念し、下宿に立てこもって勉学に没頭したことは広く知られている。しかしまったくの独学だったわけではなく、最初の 1 年近くはクレイグという初老のシェークスピア学者の個人指導を受けたのである。この時の謝礼は 1 回 5 シリングだった。1 シリング=1200 円で換算すると 1 回の個人指導の謝礼はおおよそ 6000 円になるけれども、これは今日の基準に照らすとやや少額すぎるようにも思われる。クレイグ氏はある程度名の知れた学者だったからである。もっとも漱石自身、別の場所では「一回七志ぐらいで纏まった規則正しい講義などのできる訳のものではない」と書いているので、先生への謝礼がいくらであったかは問題なしとしないが、先生に会って話を決めた当日の記述を優先すべきであろう。1900 年の 11 月 22 日の日記には 5 シリングとなっていて、「永日小品」の「クレイグ先生」では 7 シリングになっているのは、作者の記憶違いか小説的な潤色のいずれかであろう。

§4 ロンドン下宿賄い事情

長島伸一氏の『世紀末までの大英帝国』（法政大学出版局、1987 年）は、ピューリタン革命からヴィクトリア時代までの英国史を社会生活史的な視点から記述した興味深い書物で、ヴィクトリア時代の労働者階級および中産階級

の暮らし向きがさまざまな数字とともに記述されている。19世紀最後の年、すなわち1900年のある事務員の家計簿と1週間の食事メニューを参照しながらアンリや漱石の食生活を検討してみよう。

英国は当時から給料の支払いが週給であったことは先に触れたとおりであるが、事務員の週給は35シリング⁽¹⁴⁾だった。これは労働者のなかでは上層に属していることを意味していた。彼の年収は91ポンドにもなるからである。年収が100ポンド以上あればミドルクラスに属するものと見なされたことは既に触れた。彼の住まいは持ち家ではなく借家ではあったが、庭付き5部屋からなる相当大きな家である。それなのに家賃は週5シリング6ペンスにすぎなかった。給与所得のわずか16%でこのような大きな家が借りられたことは、今日の住宅事情からは想像が困難である。

所在地や築何年かなど、さまざまな条件により同じ大きさの住宅でも家賃が異なるのはもちろんのことであるが、それにしてもわが国の、それも大都市でこれだけの住居を給与所得のわずか16%で借りることは、日本の給与所得者の大半にとっては不可能であろう。この家の家賃を月15万円、月収を40万円と仮定しても、給与に占める家賃の割合は38%近くにもなるからである。

家賃の占める割合が低かったのに対し、食費の占める割合は恐ろしく高く、これも今日ではほとんど信じられないほどである。この事務員の家庭では、食費は実に給与の約56%を占めたのであった。恐ろしく高いエンゲル係数であるといわなければならない。この家庭では家賃と食費の支出で全収入の72%になり、他の支出、例えば教養・娯楽費とか交際費などは相当制限されたことが容易に想像される。漱石のようにたくさんの書籍を購入する余裕などあるはずもなかった。漱石の場合は3食付きの下宿代が53円だったとすれば、これは彼の月収150円の35%に過ぎない。

漱石の英国滞在中にロンドンの勤労者を調査したC・ブースの『ロンドン市民の生活と労働』という書物が刊行された。これは1889年から91年にかけて2巻本として刊行された著作の最終版であり、13巻からなる浩瀚

なものである。この書物のなかでブースは週給 21 シリングと 22 シリングの間に「貧困線」を引いている。⁽¹⁵⁾ 22 シリングを 52 倍すると、その人物の年収はおよそ 57 ポンドになる。そしてロンドンにはこれ以下の貧困層が実に勤労者全体の 30% も存在していたのである。

それではミドルクラスの人々はどのような暮らしをしていたのであろうか。長島氏の著書にはある新婚の専門職の年間の家計が紹介されている。⁽¹⁶⁾ この家の主人の年収は 700 ポンドである。この夫婦は 2 人の召し使いを雇い、それぞれに年 42 ポンドの給料を支払っている。この 2 人の召し使いも当然貧困層に分類される。夫婦にはまだ子どもがいなくてもあり、余裕のある暮らしを送りながらも、毎月 50 ポンドの貯金と 200 ポンド以上の残金がある。彼らの食費はわずかに収入の 20% そこそこである。それでいて食事の内容は、先に見た事務員の家庭のそれに比べてはるかに質量ともに豊かである。もっとも、だからといって事務員の家庭の食事の内容がとりわけ貧しいわけではない。むしろ今日の栄養学の見地からすれば、ミドルクラスの新婚家庭はカロリーの摂りすぎという評価を受けるかもしれない。

しかし、専門職の家庭と比較して挙げられている貧困層に属する四輪馬車の御者の家庭のそれが、栄養という見地から問題があることは明らかである。とりわけ蛋白質とビタミンの不足は著しい。もちろん、これはあくまでも英国のわずか 3 世帯の食事の内容であり、これだけで今世紀初頭の英国人の食事について云々することは軽率であろう。しかし、ある程度の目安にはなるはずである。

彼らの食事の内容を具体的に検討してみよう。御者の家庭では、朝食はパン、バター、紅茶のみかそれにベーコンが追加される程度である。⁽¹⁷⁾ 事務員の家庭ではパン、バター、紅茶の 3 点セットのほかに、毎日フライド・エッグ、ベーコン、缶詰肉、ソーセージ、ゆで卵、トマトのうちの 2 品が追加される。⁽¹⁸⁾ 専門職の家庭では 3 点セットのほかに、マーマレード、ミルク、コーヒーなどを含め計 10 品目くらいが食卓に供せられている。しかも、そのなかにはポリッジ、フライド・ベーコン・エッグなど、御者や事務員の食

卓には登場しなかった品目が存在している。⁽¹⁹⁾ 適切なというよりはむしろ過剰なという印象を筆者などはもつのだが、いかがなものであろうか。

昼食は御者の家庭では4品目くらいの日が多い。そして朝食には登場しなかった豚肉など肉類やジャガイモ、玉ねぎといった野菜が登場する。そしてデザートとしてプディングを食べている。事務員の昼食は、品数は御者の家庭のそれとほとんど変わらない。しかし御者の家庭よりもヴァラエティーに富んでいて、スタフト・ポーク、スペアリブ・パイ、ボイルド・マトン、羊肉のシチュー、マッシュト・ポテト、カリフラワーなどが登場する。専門職の家庭では品数も日によっては10品目くらいになり、しかも御者や事務員の家庭の食卓ではお目にかかることのできなかった料理がいくつか現れる。たとえばハリコー・マトン（羊肉と野菜のシチュー）、コールド・チキン、リソウル（肉まん）、ボイルド・ライス、オレンジなどである。

夕食になると階層格差つまり収入格差はより歴然と食卓上に現れる。御者の家庭では調査された1週間のうち夕食を食べたのは4日間だけである。しかも、そのうちの1日は紅茶だけで済ませている。もっとも、このことから御者の家族が空腹のまま床に就いたと考える必要はないのかもしれない。よく知られているように、英国では3度の食事のほかにティー・タイムがあって、その際もただお茶を飲むだけではなく軽食も同時に取ることが普通だからである。漱石は「英国人は1日に5回も食事をする⁽²⁰⁾」と驚いているほどである。

同じティータイムといっても、食卓にのるものにはやはり歴然として階層格差が存在した。御者の家庭では例外もあるとはいえ、ほとんどが朝食の3点セット（パン、バター、紅茶）と同じ品目である。事務員の家庭ではその3点セットのほか、鯖の酢漬け、ゆで卵、缶詰肉などもあり、単なるお茶ではなくて、むしろ正式の食事と呼んだほうが適切だと思われるほどである。漱石の印象は日本人として自然な反応であると思う。日本にもおやつやお茶の習慣は存在するが、それに比べてはるかに食事としての体裁を整えているからである。

事務員の家庭は御者の家庭とは異なり、夕食を毎日とっている。しかし、どちらかといえば軽い食事で、むしろわれわれの目にはこちらのほうがお茶の時間に見えるほどである。専門職の家庭では、ティータイムは事務員の家庭のそれと大きな相違は認められない。夕食は昼食よりは多少軽いものの、それでも毎日6ないしは7品目の料理が提供されている。もちろん、それぞれの料理をどの程度の量食べるかも大きく影響するので、料理の品数だけから早計に結論は下せないけれども、専門職の家庭は栄養を摂りすぎているのではないかと思われる。

各階層の食事を見て気がつくことは、今日の食事に比して野菜と果物の摂取が少ないということである。これにも階層格差が歴然と存在し、専門職の家庭では相当程度の量が確保されているのに対し、年収が少なくなるにつれて摂取量も少なくなっている。これは現代に比べて野菜や果物が相対的に高価な商品だったからである。

英国の生活でアンリがもっとも驚いたのは食事の彼我的相違だった。風景、町のたたずまいにも英国と故国フランスとでは大きな相違があったが、それ以上に食事の相違が外国に来たことを実感させたのである。食事の問題が大きな感心事であったのは18歳という食べ盛りの年齢も関係があろう。パンが十分食べられないこと、そしてそのパンもフランスのものと異なっていることなどがアンリの不満の大きな部分を占めていた。ある時は他の荷物といっしょにパンを送ってくれるよう家族に依頼したことさえもあった。

アンリの不満にもかかわらず、ナイチンゲール家で供される食事が当時の英国の家庭と比べて特に貧弱なものだったとは思われない。社会的に立派なミドルクラスに属していた同家の食事は、先に見た例のうち専門職の家庭の食事に近いものが供されていたと思われるからである。事実、同家の食事は1日4回で、朝食は3点セットにジャム、ゆで卵あるいは魚が追加された。飲み物は紅茶ではなくミルクの場合もあった。昼食はパンの代わりにスグリの入ったお菓子、ジャム、魚料理など、ティータイムには紅茶のほかはお菓子と鰯。夕食はパン、サラダあるいはジャガイモ料理。紅茶以外の飲み物が

ワインではなく、シロップかビールであるのもワインの国の住人には驚きだった。

漱石の場合にも、彼の帰国後の回想が暗い色調に染められているにもかかわらず、彼の食生活事体は当時の英国人から見てそれほど貧弱なものではなかった。食事に関する記述はそれほど多く見受けられるわけではないが、彼が元々油濃いものを好んだという事実に加え、帰国後も英国風の朝食を好んだ事実からして、彼は英国の食事をそれほど嫌っていたようには見受けられない。当時はロンドンの町に和食レストランはなかったであろうし、味噌・醤油などを売る店もおそらくは存在しなかった。そして漱石自身も和食を食べたいなどということは手紙にも日記にもほとんど書いてはいないのである。

彼の朝食（プレット家での）はオートミール、ベーコン 1 枚と卵 1 つあるいはベーコン 2 枚、トースト 2 枚および紅茶である。また昼食には魚、肉米、ジャガイモ、プディング、パイナップル、クルミ、蜜柑などである。ここに挙げたもののみですべてを判断するのはやや乱暴ではあるが、いずれにしても漱石の下宿での食事は、長島氏が例として挙げている御者の家庭のそれよりは質量ともに優れていることは了解されよう。事務員の家庭のそれにほぼ等しいといえるのではないだろうか。特に果物や野菜の豊富さは注目に値する。

この事務員はあと少しでミドルクラスの仲間入りも可能なほどの収入を得ていることを思えば、漱石のロンドンの暮らしは少なくとも食事という観点からするならばミドルクラスとはいえないにしても、最上層の労働者のそれにはほぼ等しかったといってもいいのではないかと思われる。われわれは「文学論」の序文や「道草」などの記述から、彼の英国での生活を必要以上に暗いものだと思込込まされてきたように思う。彼が「発狂」を噂されるまでに自己を追いつめていったのは別の原因があったものと思われるが、ここではその問題に触れる余裕はない。

アンリの場合には、彼の週給が 10 シリングであるのにナイチンゲール家

への毎週の支払いが 12 シリングであるから、彼の生活は家庭からの仕送りがなければ成立しなかった事情は先に見たとおりである。家庭からの仕送りはかならずしも彼の支出に見合ったものではなかったように見受けられる。彼は自分が無駄遣いをしているわけではないといいながら、何度が無心の手紙を両親に送っている。そしてアンリのその言葉には嘘はなかったと思われる。彼は月曜から土曜まで仕事をしていたし、夜はナイチンゲール氏にフランス語のレッスンをしていたからである。従って、彼はレッスンの終わった後散歩に出かけることがしばしばあった。幸い季節は英国の天候がもっとも安定する夏であったし、緯度の高い英国では夏は夜になってもなかなか日が暮れないのである。彼が金銭的には窮屈な生活にもかかわらず、英国に対してよい印象を持って帰国できたのは彼が若かったこと、滞在がわずか 2 ヶ月半と短期であったこと、仕事の内容も彼の能力を越えるものでなく、むしろ彼に自信を与えてくれるものであったこと、とりわけ英語の力がついたことを彼は誇らしげに報告している。またナイチンゲール氏というよき庇護者に恵まれたことも彼の幸運だった。

漱石の場合はほとんどその裏返しであった。彼はもはやけっして若くはなかった。当時の 30 代半ばは立派な中年だった。彼には遠い故国に妻も子どももいて、その妻は現在妊娠中で、また新しい家族が 1 人増えようとしている。日本人としての暮らしに慣れて、風俗・習慣の大きく異なる英国社会に馴染むこともなかなかできない現実、そこでの 2 年にわたる暮らし、「英語研究のため」の留学ではあるが、文学研究でも構わないことを文部省で確認したものの、その文学研究なるものが何をどのようにしたらいいのかなかかわからない宙ぶらりんな精神状態、漢文学の良さは十分にわかるのに、それ以上の学力をもっているはずの英文学の理解に自信がもてないこと、とりわけ最後のものは日本人による英文学研究、ひいては日本人による外国文学研究の根幹に触れる問題として、今日でも完全に決着のついていない問題である。「夏目発狂セリ」の報が文部省に届いたのは 1902 年（明治 35）の帰国間近だった。彼は英国嫌いになって帰国し、2 度と英国の土を踏むことは

なかった。しかし、彼は帰国後もなお数年間は高等学校や大学で英語、英文学を教えなければならなかった。英国留学の成果も「文学論」、「文学評論」などの形で纏められた。もちろん留学中の計画に比べれば、はるかに縮小された形ではあったが、また「倫敦塔」をはじめとするいくつかの作品も留学がなければ書かれることなく終わったであろう。作家漱石の誕生に英国留学が関係があったかなかったは簡単に結論の出せる問題ではないが、異なった環境に身を置くことによって、それまでの自己を異なった視線で眺めることを可能にするのが外国暮らしの特権だとすれば、「夏目発狂セリ」とまで評されるまで自己を追い込んだからこそ、その狂気の出出が彼の作品を産み出したのだとしてみる誘惑にかられるのも事実である。漱石が高浜虚子の勧めで「ホトスギ」に「猫」の連載を始めたのは、帰国からおおよそ2年後の明治38年1月号からだった。日露戦争はまだ終わらず、難攻不落を誇った203高地陥落に日本中が沸き返っていたころのことである。

漱石は1902年の12月に2年間を過ごした英国を後にした。アンリはそれからおおよそ3年後の1905年9月、やはりエコール・ノルマル入試に備えるべくフランスに帰った。漱石は帰国後おおよそ10数年生きて第1次大戦中の1916年(大正5)、胃潰瘍のため亡くなった。漱石の死に先立って、彼より20歳も若いアンリは既に大戦開始直後の1914年9月、サン・レミの森の戦闘で銃弾に倒れていた。

〔註〕

- (1) 「義父中根重一宛書簡」『漱石全集』第22巻, p. 252, 岩波書店, 1996年.
- (2) 「日記」『漱石全集』第19巻, p. 24-25, 岩波書店, 1995年.
- (3) 同上書, p. 25.
- (4) 出口保夫『ロンドンの夏目漱石』, p. 26-27, 河出書房新社, 1991年.
- (5) 「日記」『漱石全集』, 第19巻, p. 48.
- (6) 同上書, p. 52.
- (7) 週刊朝日編『値段史年表』, それぞれ p. 91, 92, 67, 朝日新聞社, 昭和63年.

- (8) 出口保夫, 前掲書, p. 38.
- (9) 同上書, p. 138.
- (10) 当時の英国の年取による社会階層の分類については, 鈴木正昭「ロンドンのアラン・フルニエ」を参照. 『中央学院大学教養論叢』第4巻第2号, 1992年2月.
- (11) 週刊朝日編, 前掲書, p. 180.
- (12) 鈴木正昭, 前掲論文, pp. 76-77.
- (13) 「日記」『漱石全集』第19巻, p. 30, 岩波書店, 1995年. および「永日小品」中の「クレイグ先生」, p. 147, 『夏目漱石全集』10, 筑摩書房, 1998年.
- (14) 長島伸一『世紀末までの大英帝国』, pp. 236-237, 法政大学出版局, 1987年.
- (15) 同上書, p. 238.
- (16) 同上書, p. 151.
- (17) 同上書, p. 239.
- (18) 同上書, p. 237.
- (19) 同上書, p. 253.
- (20) 「日記」『漱石全集』第19巻, p. 52.
- (21) 鈴木正昭, 前掲論文, p. 80.
- (22) 「倫敦消息」『夏目漱石全集』10, pp. 653-654, 筑摩書房, 1988年.
- (23) 「日記」『漱石全集』第19巻, p. 60. これは1904年(明治34)4月20日の昼食である. 同年3月5日付の日記には「スープ一皿, cold meat 一皿, プディング, 蜜柑一つ, 林檎一つ」を昼食に食べたという記載がある(『漱石全集』第19巻, p. 61).